

ケニアで過ごした二週間

京都大学工学部工業化学科 2 回

坂元 愛美子

今回ケニアに行ったのが私にとっての初海外でした。出発するまで家族や友達には食べ物のことや病気のことなど心配されるばかりでしたが、わたしは念願のアフリカに行けることが嬉しすぎて何一つ不安なくただただ楽しみにしていました。実際、エルドレットでの5日間のホームステイ、マトマイニでの4日間の滞在を含むケニアでの2週間は毎日が本当に充実していて、朝起きて夜寝るまでの一分、一秒でさえ無駄にはしていないと思いながら日々を過ごしていました。

エルドレット市内にある田舎の農村でのホームステイは何もかもが衝撃的でした。とにかく村の人達は元気で陽気な人が多くて、そこらじゅうに子供たちがたくさんいてみんなものすごく愛想がよくて。道直し研修や小学校訪問、教会や結婚式などどこへ行っても、会う人会う人と言葉を交わし一緒に歌ったり踊ったりしました。電気もガスも水道もなく、見渡す限り畑が広がり、朝昼晩のご飯のメニューは毎日同じという本当に何も無いと言ってしまえば何も無い村でしたが、そこには村人全員が親戚同士であるかのような人々の強いつながりがあり、そこにいる人皆がお互いに助け合って生きているんだということを感じました。

道直しの活動の朝、ホストファミリーに連れられて現場に着いたのは集合時間より1時間くらい遅く、私と同じようにばらばらと遅れてくる人がいてもみんな全く気にしておらずこれが噂のケニアタイムかぁと感動したのを覚えています。しかし作業中はみんなとても真面目で、土を土のう袋に詰める係、土のうを固める係、溝を掘る係というふうに自然と役割分担ができ、休むことなく熱心に働き続けていました。ケニアの人に比べて力の無い私たちはあまり役に立ったとは言えないかもしれませんが、それでもいろんなことを話しながら一緒に汗を流して働いて道が完成したときには本当に嬉しかったです。たまたまその日の晩に記録的な大雨が降り、次の日外へ出ると家の前の道は完全に水没していて周りも長靴でも歩くことができないほどのぬかるんでいたにもかかわらず、土のうで直した部分の道だけがしっかり硬いまま、土のうの効果に驚いて「すごいね」と私が言ったときの、「まあね」という村人の得意げな顔が印象的です。

村でのホームステイを終え次に訪れたマトマイニでもまた、たくさんの貴重な経験をすることができました。ナイロビは村とは違い全くの都会で、JICA

の会議に出席したり、ケニアで活動している日本人の NGO 団体の活動を見学したりして、今まで知らなかったケニアと日本のつながりを知ることができました。マトマイニはそんな大都市の中にあるとは思えないほど緑がたっぷいのとてものどかな場所で、私の思い描いていたいわゆる孤児院のイメージとはかけ離れていました。広い敷地の中に畑があり家畜もいて、たくさんいる子供たちはみんなまるで本当の兄弟のように仲が良く、大家族でわいわい生活しているみたいな暖かさがマトマイニにはありました。そんな楽しい子供たちでもその生い立ちやマトマイニに来た理由を聞くと、その笑顔からは想像できないほどの悲しい過去があり世の中の不条理を感じました。それでも子供たちは本当に明るく、みんなすごく勉強熱心でそれぞれの将来の夢に向かって努力していて、私と同じ年とかそれよりも小さい子たちのそんな頑張っている姿に心を打たれました。またマトマイニの生徒の一人とともにスラムを訪問し、スラム内にある非公式の小学校や職業訓練所にも訪れました。始めはスラムに住む人々の様子が田舎の村人たちと違ってどこか冷ややかなように感じられ少し怖いという印象を受けましたが、ある住民と対談したり立ち並ぶお店や道行く人々を見ていると、スラムというのは決して特別な場所ではなく、そこには普通に暮らす人々がいてそこでの生活があり、同じように人々が生きているということがわかりました。

このように滞在中は一日一日の内容がとても濃く、毎日いろんなことを経験してそのたびにいろんなことを考えて毎晩頭がいっぱいでした。帰国してから改めて考え直してわかることもあり、本当に勉強になった二週間でした。

このようなすばらしいチャンスを与えてくれた木村先生、また今回の活動にご協力していただいた道普請人の方々やケニアの人々には本当に感謝しています。ケニアに行って直接体で感じたすべてのことが私にとってはとても新鮮で刺激的で、国際技術協力に対してだけでなく日常生活の中の様々な物事に対する私の考え方に影響を与えたと思います。ケニアで学んだことをこれからの生活に生かしていきたいです。